群教セ	G08 － 03
	平27.254集
	高・商業

商業科目「財務会計Ⅰ」における身に付けた知識の活用力を高める指導の工夫

── 財務諸表データ比較クイズの作成と発表を通して ──

特別研修員　安達　泰照

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

県立学校教育指導の重点（平成27年度）では、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるとともに、これらを活用する能力を育成することを重視している。

商業科目「財務会計Ⅰ」のねらいは、会計情報を利害関係者に提供する能力と態度及び提供された会計情報をビジネスの諸活動に活用する能力と態度を育てることである。

本校の生徒の多くは、知識・技能の習得がされている。しかし、その知識を活用する能力が不足している。それは、実際の企業の財務諸表に触れる機会がなく、数値データの具体的な利用法を知らないため、身に付けた知識が役に立つものと実感できないことが原因だと考えられる。

そこで、生徒に身近な同種企業２社の財務諸表を比較・分析させ、分析したデータからその企業の特徴に気付かせ、身に付けた知識が活用できることを実感させることで、知識を活用する力を高めたいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図

２　授業改善に向けた手立て

(1) 実践１（単元「第４編　財務諸表の活用」情報ビジネス科第２学年・１学期）

学習した財務分析の知識を活用するために、以下の流れで実践を行った。

①選択した企業の財務諸表の数値を読み取り、略式の損益計算書と貸借対照表に記入する。
②略式の損益計算書と貸借対照表から学習した知識を活用して関係比率を計算する。
③略式の損益計算書と貸借対照表の数値から構成比率を計算して円グラフを作成する。
④上記②と③を使ったクイズと解説を考える。

通信事業者（携帯電話）と大手自動車メーカーの財務諸表を提示する。生徒にどちらか一方の業種を選択させ、財務諸表の数値を読み取って略式の損益計算書と貸借対照表に記入する。記入した数値から関係比率を計算する。さらに、記入した数値から構成比率を計算し、円グラフを作成する。関係比率の計算結果と構成比率の円グラフを使い同種企業２社を比較したクイズを作成する。クイズの解説を着目した点が明確になるように考える。なお、すべての活動はペアまたはグループで行う。

(2) 実践２（単元「第５編　連結財務諸表」情報ビジネス科第２学年・２学期）

実践１と同様の流れでクイズと解説を作成し、発表を中心にして以下の流れで実践を行った。

①配布プリントから各グループの問題の答えと工夫されている点を学習した知識を活用して考える。
②代表者が前に出てクイズを発表し、指名したグループに解答してもらう。
③解答に対して、着目した点と工夫したことを中心に解説を行う。
④発表を聞いて、工夫されている点などをグループで話し合い評価シートに記入する。

各グループの問題が印刷されたプリントを配布し、答えと工夫されている点を話し合わせる。代表者２名が発表し、指名したグループに解答させる。着目した点と工夫したことを中心に解説を行う。すべての発表を聞き、工夫されていた点などを話し合い評価シートに記入する。なお、同じ企業で実践２を行うことで連結財務諸表の意味や目的がより明確になり、その重要性を理解させることにつながると考えた。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　実際のデータを扱うことで、ほとんどの生徒が授業の内容に興味を持って取り組んでいた。
○　クイズを作成する過程で、ペアやグループでの話合いが活発に行われていた。
○　クイズの作成と解説を考えることで、学習した知識を活用できていた。
○　簿記会計分野における、知識を活用させる授業の教材の一つを作り上げることができた。

Q. あなたは、授業内容に興味を持てましたか。

	実践１(21名)	実践２(27名)
①　持てた。	15 人　(71.4%)	12 人　(44.4%)
②　少し持てた。	5 人　(23.8%)	14 人　(51.9%)
③　あまり持てなかった。	1 人　(4.8%)	1 人　(3.7%)
④　持てなかった。	0 人　(0.0%)	0 人　(0.0%)

Q. あなたは、新たな知識や、考え方を身につけることができましたか。

	実践１(21名)	実践２(27名)
①　できた。	18　人　(85.7%)	13　人　(48.1%)
②　少しできた。	3　人　(14.3%)	14　人　(51.9%)
③　あまりできなかった	0　人　(0.0%)	0　人　(0.0%)
④　できなかった。	0　人　(0.0%)	0　人　(0.0%)

図１　アンケート結果（一部抜粋）

２　課題

○　発表することに慣れていないため、今後も授業の中で発表させる機会を設けていく必要がある。
○　クイズや解説の作成時に、具体的なアドバイスができるようにクイズ例を作成する必要がある。
○　今回の実践以外の単元でも、知識を活用させる工夫を考えていくことが必要である。
○　授業時間数の関係で実施が難しいことが予想されるので、年度当初から計画することや、短時間で実施できるような教材開発が必要である。

＜授業実践＞

実践１

１　単元(題材)名　「第28章　財務諸表分析」（情報ビジネス科第２学年・１学期）

２　本単元及び本時について

本単元では、財務比率などの財務指標の意味と計算方法を習得させるとともに、同一企業における期間比較や同業他社比較を行わせることで、それぞれの特徴に気付きこれまで学習した内容が、企業の実態分析に役立つことを理解させる。また、生徒に身近な通信事業者（携帯電話）と大手自動車メーカーを取り上げることで、自ら積極的に取り組ませることができると考えた。

本時は、前時の学習内容（財務指標の計算）を用いて次のような流れで行った。

・前時に読み取った財務諸表の数値を構成比率にさせ、円グラフを作成させる。
・関係比率や構成比率の円グラフから、気付いた特徴をクイズにして解説を考えさせる。
・プリントに問題文と特徴を表現したグラフを作成させる。

この流れにすることで、生徒が主体的に企業の特徴を読み取り、比較して分析する活動となり、身に付けた知識が役に立つものであること、活用できることを実感させることにつながると考えた。

なお、全ての活動を４人一組のグループ（２人組のペアを二組）で行わせることで、協働的な学習にもつながると考えた。

３　授業の実際

(1) 財務諸表の数値から円グラフの作成

前時の財務諸表データから読み取った数値（図２）を使い、損益計算書と貸借対照表を構成比率にした円グラフ（図３－①、②）を作成させることで、漠然としていた数値データから特徴に気付きやすくなると考えた。また、構成比率は1年次のビジネス基礎で学習済みの内容だが、プリントには構成比率を求める式を示しておき、生徒の作業が止まらないように配慮した。しかし、予想していたよりも構成比率の計算や円グラフの作成に時間がかかる生徒が多かった。

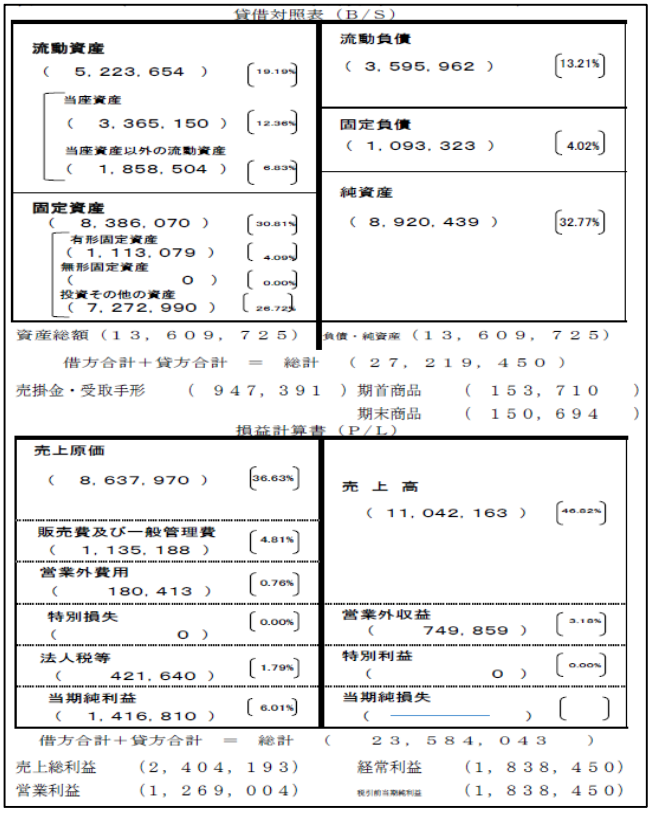


図２　読み取った数値

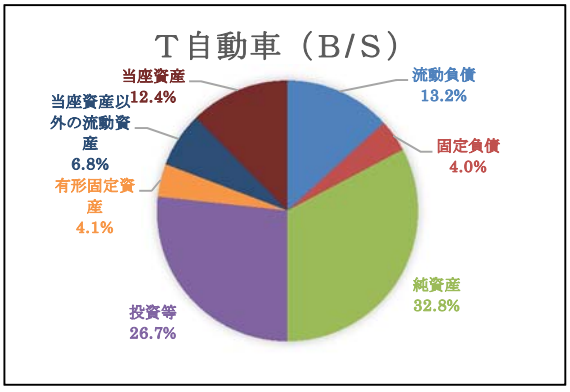


図３－①　円グラフ（貸借対照表）

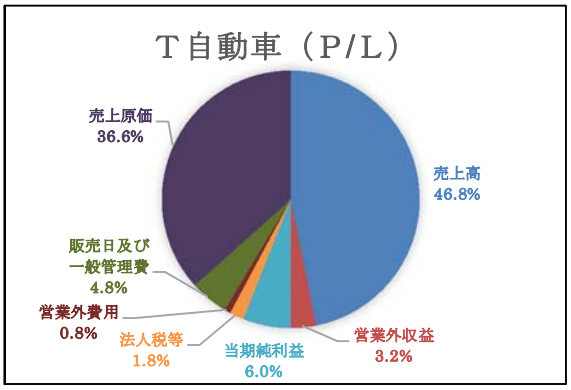


図３－②　円グラフ（損益計算書）

⑵ クイズと解説を考える

円グラフの構成比率や金額からその特徴に気付かせ、前時の関係比率の計算結果を活用してクイズ（図５）と解説（図６）を考えさせる。クイズは、２社の計算結果等の資料（図４）を比較し、一見しただけでは誰もが勘違いして、間違えてしまうような問題を考えさせる。こうすることで受け身だった生徒が、自ら積極的に考える活動になると考えた。また、解説には、三つの視点（安全性分析、収益性分析、成長性分析）を考えさせることで、既に学習した知識を活用する活動にした。

	自己資本利益率	自己資本比率
Ｔ自動車	15.88%	65.54%
Ｎ自動車	19.84%	45.37%

	当期純利益	売上高
Ｔ自動車	1,416,810(6.01%)	11,042,163(46.82%)
Ｎ自動車	425,494(5.25%)	3,737,844(46.13%)

	負債総額	自己資本
Ｔ自動車	4,689,285(17.23%)	8,920,439(32.77%)
Ｎ自動車	2,582,148(27.32%)	2,144,281(22.68%)

※（　　）は貸借合計額を基準にした構成比率

図４　計算結果（一部抜粋）

・収益性が高いのはＴとＮのどちらか？
・自己資本比率が高いのはＴとＮのどちらか？

図５　クイズの例

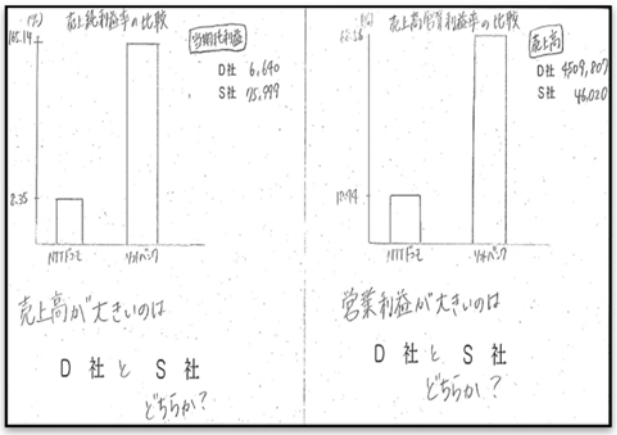
・金額だけを見るとＴの利益が大きい。しかし、自己資本利益率を計算するとＮの方が、収益性が高いといえる。
・ＴとＮの負債の金額を比較するとＴの方が大きく、Ｎの方が小さい。だが、関係比率を計算するとＴの方が、自己資本比率が高い。

図６　解説の例

⑶ 問題文とグラフの作成

発表の際に着目した点を伝えやすくするために、考えたクイズとその特徴を強調するための簡単なグラフをプリントに記入させた。このことで、グループで問題の整合性を確認することにも役立った。

生徒作成のクイズ（図７）には、単純な数値だけを比較するグループから、金額の大小と関係比率を比較することで勘違いを誘う工夫など、想像していた以上に良く取り組んでいた。しかし、発表をさせた際に、声が小さかったり、話し合ったことをうまく表現できていなかったり、他のグループの問題に取り組んでいないなど課題が残った。



解説（生徒の解説例）

左の問題の答え：Ｄ社
・売上純利益率を見るとＳ社の方が高いが、当期純利益を計算式に当てはめて売上高を計算するとＤ社の方が高いことが分かる。

右の問題の答え：Ｄ社
・売上高営業利益率を見てもＳ社のほうが高いが、売上高を計算式に当てはめて営業利益を計算するとＤ社の方が高いことが分かる。

図７　生徒作成のクイズ

４　考察

○　ほとんどの生徒が授業の内容に興味を持って取り組めていた。
○　財務諸表の数値から関係比率を計算する作業に時間がかかり過ぎた。
○　クイズの発表は、グループ内で役割をはっきりさせたほうが積極性が引き出されると感じた。

＜授業実践＞

実践２

１　単元（題材）名　「第31章　連結財務諸表の作成」（情報ビジネス科第２学年・２学期）

２　本単元及び本時について

本単元では、連結決算日における連結財務諸表の作成について学習する。これまでに学習した個別財務諸表に子会社や関連会社の財務諸表を含めた計算をしていく。

まず、連結決算で必要とされる開始仕訳から当期分の連結修正消去仕訳について学び、連結財務諸表作成の基礎を理解させる。そして、すでに学んだ知識を活用し連結財務諸表における財務分析を行っていく。

単元の最後に、実践１と同様の流れでデータ比較クイズの作成と発表をさせることで、身に付けた知識の活用力を育むことにつなげていく。取り上げる企業を、実践１と同じ企業にすることで、連結財務諸表の意味や目的がより明確になり、重要性についても理解させることにつながると考えた。

前時までに次のような流れで学習した。

・財務諸表の数値を読み取り、構成比率を計算し、円グラフを作成させる。
・関係比率や構成比率の円グラフから、気づいた特徴をクイズにして解説を考えさせる。
・クイズの問題文とその特徴を表現したグラフを作成させる。

本時は、前時の作業内容を用いて次のような流れで行った。

・配られたプリントから各グループの問題の答えと工夫されている点を考える。
・代表者が前に出て問題を発表し、指名したグループに解答させる。
・解答に対して、着目した点と工夫したことを中心に解説を行う。
・発表を聞いて工夫されている点をグループで話し合い評価シートに記入する。

この流れにすることで、各グループで考えた問題を全体で共有し、お互いに評価し合うことになり理解が深まり、身に付けた知識の活用力が高まると考えた。

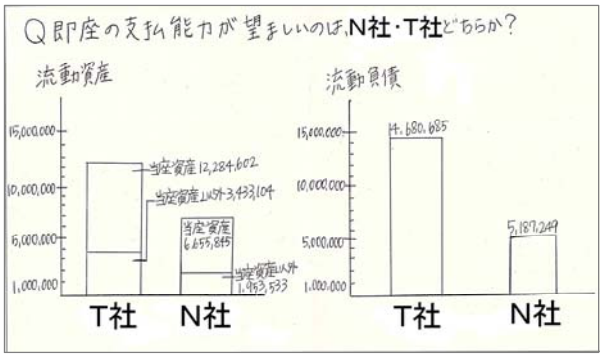
３　授業の実際

実践１と同様の手順でデータ比較クイズと解説を作成させ、実践２では話合いと発表を中心に授業を行った。

(1) 連結財務諸表の数値を用いたクイズや解説の作成（前時まで）

実践１で取り上げた企業と同じ企業の連結財務諸表（会計年度も同一）とすることで、個別財務諸表と連結財務諸表の比較が可能な内容とした。これにより、連結財務諸表の意義や必要性をより明確に実感させることができた。また、実践１と同様の流れにしたことで、財務指標の計算やグラフの作成を短時間で終えることができた。クイズと解説の作成も２度目であることから、クイズの内容が簡潔になり、解説も具体的な内容になった。

しかし、実際のデータでは、教科書と表記が異なっているところが多く、数値を読み取ることに戸惑っている生徒もおり個別と連結を比較するという発想を持てない生徒もいた。比較する視点を持たせるための手立てが必要だと感じた。



解説（生徒の解説例）

答え：N社

・即座の支払能力は「当座比率」の数値で分かる。
・各グラフの金額（当座資産・流動負債）から当座比率を計算すると、T社は 83.68、N社は 128.31 となる。
・即座の支払い能力は 100%以上が望ましいので、答えはN社と考えられる。

図８　生徒作成のクイズ（連結財務諸表の財務指標から）

⑵ 問題の答えをグループで話し合う

各グループの問題が印刷されたプリントから、グループで答えとその根拠を話し合わせた。実践１では、クイズ出題後、すぐに解答させていたが、考えがまとまらず解答までに時間がかかる生徒が多かった。そのため、実践２では考える時間を与えることにした。こうすることで、答えの根拠まで考えさせることができ、グループでの話合いを深めさせることができた。しかし、この作業への時間を多く取り過ぎてしまい、発表をまとめる時間を十分に取ることができなかった。

図９　話合いの様子

⑶ グループの役割分担

実践１の反省を踏まえ、グループ４名のうち、クイズの問題を書画カメラで写す生徒と、問題を読み解説を行う生徒の２名に発表させた。残りの２名は、他のグループから指名された際、クイズに解答する生徒と、発表用の用紙に問題を書く生徒にした。こうすることで、グループ４名全員が役割を持ち積極的に取り組む活動にすることができた。

⑷ 代表者の発表と解説

問題を発表する際には、事前に大きな声で行うように指示をした。声が小さくて聞きとりにくいグループもあったので、人前で話すことに更に慣れさせる必要性を感じた。

解説は、各グループで話し合った内容のため、それぞれの着目した点がはっきりとしていた。工夫したことをうまく説明できていないグループもあったので、話し合ったことを表現する力を伸ばしていく必要性を感じた。

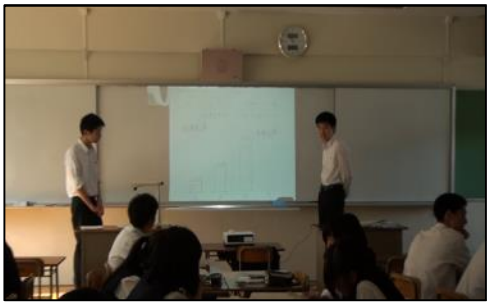


図 10　発表の様子

⑸ 他のグループを評価する

評価シート（図11）を用いて、クイズや解説、発表について評価させた。評価項目に点数を付ける得点は、１項目５点で５項目の合計が25点、グループ４名の合計が100点となる。評価をさせることで、発表を漠然と聞くのではなく評価項目に沿った観点で聞くことができ、主体的な取り組みにすることができた。また、グループでの作業を増やすことで、より活発な話し合いが行われ、消極的になっている生徒も、関わりやすい活動になった。

No.	評　価　項　目
1	両社を比較した問題になっているか？
2	注目した数値と問題に整合性があるか？
3	よく考えないと答えが間違ってしまうような工夫がされていたか？
4	答えの解説は、注目した数値と工夫した点がはっきり示されていたか？
5	発表は見やすく、聞きやすくされていたか？
	計（各項目２５点×４名＝１００点）

図 11　評価シート

⑹ 発表のまとめと振り返り

各グループの問題について良かった点や工夫していると感じた点を教師側から説明した。また、クイズや解説は生徒の考えで作成しているため、補足説明や間違っている部分について修正をした。

４　考察

○　クイズの答えと工夫している点を話し合う際に、学習した知識を活用できていた。

○　クイズの答えを考える際に、問題の内容を捉え、話合いが深まっているグループが多かった。

○　話し合ったことを表現させる場面を普段から設ける必要性を強く感じた。

○　連結財務諸表と個別財務諸表の比較という視点を強調することで、クイズのバリエーションの多様化や、クイズ内容の工夫につながると考えられる。